




様式4（第2条関係）

博士（口腔科学）学位論文内容要旨




受付番号	甲第 8 号*	氏名	瀬戸口 祐子
博士（口腔科学） 学位論文の題名	歯科衛生士養成課程に在学する学生の臨床実践能力と自己教育力に関する意識調査		
<p>歯科衛生士が社会から求められているニーズが多様化する中、変化に対応できるよう、歯科衛生士養成課程において自己教育力を養うことが重要である。看護学分野では臨地実習が自己教育力を伸ばす機会の一つであるとの検討が多くなされているが、歯科衛生士養成課程では、臨地実習と自己教育力の関連についてはほとんど検討されていない。そこで本研究では歯科衛生士養成課程において学生の臨床実習前後の臨床実践能力や自己教育力の自己評価を通じて意識の変化を学校群別で探ることを目的とした。</p> <p>3年制の専門学校、短期大学、および4年制大学それぞれの歯科衛生士養成課程に在籍する学生を対象に、臨床実習前後での自己評価方式の意識調査を行い、臨床実習が臨床実践能力や自己教育力に与える影響や、学校群別の違いについて検討した。調査項目は「臨床実践能力習得状況」24問については、2018年に公益社団法人日本歯科衛生士会が作成した「臨地実習指導マニュアル—歯科衛生士学生指導のために—」を引用した（公益社団法人日本歯科衛生士会から許諾を得て使用）。「臨床実習に対する思いや考え」6問については、独自で開発したものを用いた。「自己教育力」40問については、梶田が作成した30項目の自己教育性調査票に西村らが追加作成した10項目を加えた計40項目からなる自己教育力測定尺度を引用した（作成者から許諾を得て使用）。実習前は計401名、実習後は計340名の学生から本調査への協力が得られ、回答を学校群別に集計し、実習前/後という時間と、学校の違いの2つの要因で二元配置分散分析を行った。</p> <p>臨床実習経験により、すべての学校群の学生が自らの臨床実践能力の向上について肯定的な意識を持つことが明らかとなった。学校群別では、専門学校や短期大学の学生は実習前から比較的高い自己評価をしている一方で、4年制大学の学生は比較的低かった自己評価を最も大きく伸ばす傾向があった。自己教育力については、4年制大学の学生は有意に伸ばす面がいくつかあったものの、専門学校や短期大学の学生にはそうした効果は現れなかった。</p> <p>以上の結果より、臨床実習が臨床実践能力の向上に寄与する一方で、自己教育力の向上には限定的な影響であることが示唆された。学校群別の違いもあり、特に4年制大学の学生は自己教育力を向上させる傾向が見られた。これらは各養成校の臨床実習への関わり方や、養成期間によって異なる可能性があり、臨床実習開始時期などにも配慮しつつ、臨床実習を通じて臨床実践能力と自己教育力の向上を促進するための学校群別の調整が必要であると考えられた。</p> <p>歯科衛生士養成課程における臨床実習は、歯科衛生士の臨床実践能力に対して有益である一方、自己教育力への影響は養成期間や養成校の違いによって自己教育力の向上への効果に相違が見られた。また臨床実践能力が向上しても自己教育力も向上するとは限らない。</p>			

※欄には記入しないでください。

博士(口腔科学)学位論文審査結果の要旨及び調査委員の氏名

受付番号	甲 第 8 号	氏 名	瀬戸口 祐子
主 査 中塚美智子 		副 査 柿本和俊  副 査 神 光一郎 	
<p>近年、歯科衛生士が社会から求められるニーズは多様化しており、歯科衛生士養成課程において自己教育力を養うことが重要である。歯科衛生士養成課程における臨地実習と自己教育力育成との関連についてはほとんど検討されていない。本研究では歯科衛生士養成課程の学生に対して調査を行ってこの課題に挑んだもので、今後の歯科衛生士養成に大いに寄与できるものであると評価できる。</p> <p>研究方法については、専門学校と短期大学、4年制大学の歯科衛生士養成課程在籍学生を対象に、臨床実習前後で、臨床実践能力や自己教育力に関する自己評価方式の意識調査を行い、臨床実習が臨床実践能力や自己教育力に与える影響や、学校群別の違いについて検討した。回答を学校群別に集計し、実習前/後という時間と、学校の違いの2つの要因で二元配置分散分析を行い、適切な研究方法である。</p> <p>得られたデータを分析した結果、臨床実習の経験により、すべての学校群の学生が自らの臨床実践能力の向上について肯定的意識を持っていることが分かった。学校群別では、専門学校や短期大学の学生は実習前から比較的高い自己評価をしている一方で、4年制大学の学生は比較的低かった自己評価を最も大きく伸ばす傾向があった。自己教育力については、4年制大学の学生は有意に伸ばす面がいくつかあったものの、専門学校や短期大学の学生にはそうした効果は現れなかった。臨床実践能力が向上しても自己教育力も向上するとは限らないことや、養成期間や養成校の違いによっても自己教育力の向上への効果に相違が見られたことが明らかになり、今後の歯科衛生士養成課程における教育方法の改善を図る上で学校群別の調整が必要であると結論づけている。</p> <p>これらの結果および考察、結論について、国内外の先行研究や文献を十分に調査したうえで出されており、また、その論旨も明瞭で、研究目的との整合性も取れていた。</p> <p>論文内容について、歯科衛生士教育において新規性があり、有用で、かつ今後の歯科衛生士教育に寄与できる、十分に価値があるものであると判断した。</p> <p>本論文の内容が査読付き論文1編で採用掲載予定であることを確認し、今まで研究が進んでいなかった歯科衛生士養成課程における臨地実習と自己教育力育成との関連について明らかにした点において、本論文は博士(口腔科学)の学位を授与するに値すると判定した。</p>			

最終試験結果の要旨及び博士(口腔科学)学位授与審査調査委員の氏名

受付番号	甲 第 8 号	氏 名	瀬戸口 祐子
主 査 中塚 美智子 		副 査 柿本 和俊 	
		副 査 神 克一郎 	
(最終試験結果の要旨)			
<p>口腔医療一般の知識を有し、ことに歯科衛生士教育についてはきわめて進んだ専門的見解をもち、それを自論文の中に提示していることを確認した。</p> <p>大学院医療保健学研究科(博士(口腔科学)学位授与調査会調査委員)の行った試験に合格した。</p>			